90-99-3103

慶應義塾大学ビジネス・スクール

ペニシリンの発見

ペニシリンは最初に実用化された抗生物質であり、20 世紀最大の医薬品といわれる。過去この薬のおかげで命を救われた人は数知れない。抗生物質がなかったら、感染症のため 20 世紀の世界の人口は現実よりかなり少なかったはずだと想像する人もいる。ペニシリンは企業の研究開発から発見されたものではなかった（合成ペニシリンに関しては多くの企業が特許を取得している）。ペニシリンを発見したイギリスのアレクサンダー・フレミング（Alexander Fleming, 1881 ～ 1955）は次のように語っている。

「新しいテーマへの挑戦は、常に個人の着想と意志によって踏み出される。ずっと以前にペニシリンが偶然に訪れたとき、もしも私が組織の中に入っていれば、本来の研究テーマとはなんの関係もないこんな“異物”を顧みることはなかったであろう。そのとき私はいかなるグループにも属していなかったからこそ、まったく予定外に拓けた脇道を個人的な興味から探索することが出来た。」（高松秀機「創造は天才だけのものか」より）

フレミング医師

第一次大戦中、フレミングはイギリス陸軍病院の研究員として戦時下のフランスにいた。当時の兵士は、銃弾や爆発で直接に死傷するより、傷口からの感染や化膿によって命を落とす方が多かった。当時の消毒薬や化膿止めは、戦傷で負うような大きい傷口に対しては、生体組織を傷めすぎて使うことができなかった。毎日のように若者が苦しみながら無駄に命を落としていき、フレミングは医師でありながら彼らを助けることができない。フレミングは何としても強力な薬剤を作りたい気持ちに駆り立てられる。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクール大林厚臣助教授がクラス討議の資料として作成したものであり、経営状況の適否を例示しようとするものではない。
本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は http://www.kbs.keio.ac.jp/ へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。
Copyright© 大林厚臣（1999 年 7 月作成，2007 年 12 月改訂，2010 年 4 月改訂）